

「島耕作」の弘兼憲史と「六本木の帝王」守川敏の熱血対談

# 信頼される上司、 見放される上司

Kenshi Hirokane

漫画家  
弘兼憲史

Satoshi Morikawa

六本木の帝王  
守川敏

裏切り、襲撃、拉致・監禁。欲望渦巻く夜の世界で漫画のような修羅場をくぐってきた守川敏氏。

栄枯盛衰の激しい六本木で25年続く高級クラブ「チック」を立ち上げた人物だ。

その成功の裏には数多くの仲間の存在があった。

彼らは給料を払えないほど困窮した守川さんを献身的に支えたという。

「信頼される人、見放される人」は一体何が違うのか。

弘兼 僕が守川くんと最初に出会ったのは、20年以上前。六本木のクラブ「チック」がオープンするときに、共通の恩師に「お前の後輩が六本木で成功しているから、その店に行ってみよう」と誘われたのが最初だよ。

守川 ビックリしましたよ。僕の中学時代の校長先生が、弘兼さんが高校時代の担任の先生なんですよね。あるとき、その先生から「すごい先輩を紹介しちゃる。『課長 島耕作』の作者だ」って言われて、「えーっ」って(笑)。以来、弘兼先生とは、飲みに行ったり食事をしたり、ゴルフやマージャンもご一緒させてもらっています。

弘兼 当時、ナイトクラブという反社会的勢力がバックに控えているケースが多かったから、初対面のときは、ちよつと警戒してたんだ(笑)。でも、そうした勢力とは無縁であなたがここまで上り詰めたことを心底すごいと思ったよ。たしか守川くんが水商売の世界に入ったきっかけは、大学生時代のアルバイトだったんだよね。

守川 はい。アルバイト情報誌に、「女性100人大募集!」って書いてあったんです。それを見て「あっ、女の子がいっぱいいる職場なんだ」って応募しました(笑)。

弘兼 チャラい男だね(笑)。ま、学生だからしょうがないよね。

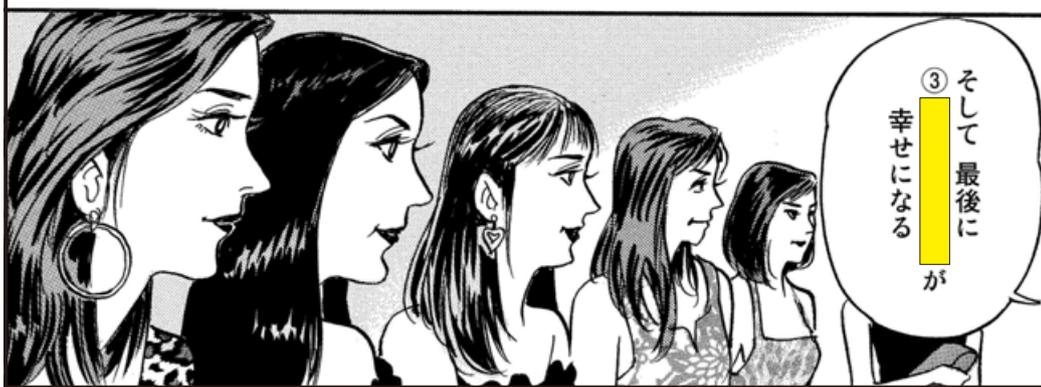
守川 ウエイターの募集だと思って行ったら、「君、スカウトマンやらない?」

って言われて。

弘兼 ナンパが得意そうな顔してたんじゃない?

守川 そこで約1年アルバイトした後、1987年に、その店のオーナーが六本木にキャバクラ「おどりだこ」をオープンすることになって、オープンニ

## クイズ! 絶対に間違えてはいけない経営の目的



弘兼憲史氏が守川氏の半生を描いた『六本木騎士ストーリー』のひとコマで、「チック」は守川氏が立ち上げた高級クラブ。クイズの答えはP121下部。

グスタフとして誘われたんです。歳のときに店長に抜擢されました。

### 大義を持つて 本気で叱る

弘兼 その後、先輩と共同出資で立ち上げた「スコール」という店を、紆余

曲折の末に辞めることになったとき、スコールの従業員たちは、「給料なんていらぬから守川さんについていく」と言ってくれた。女性たちをはじめスタッフに誠実に対応してきたからこそ得られた財産だよ。

守川 僕はスコールに全財産を投資していましたが、実は生きるか死ぬかというぐらいの窮地だったんですけど、彼らがついてきてくれたので「必ず這い上がれる」という確信がありました。彼らとは年も近かったので、僕のことを「いいお兄ちゃん」と思ってくれていたみたいです。ただ、悪いことをするとメチャメチャ怒る兄でした。

弘兼 えっ、守川くんが?

守川 はい。店の女性たちが今で言う「パパ活」に流れそうになったら、本気で叱りつける。その子にとってよくないと思うことは、たとえ嫌われたり煙たがられても真剣に伝えます。男性スタッフに対してはそうです。不良とつきあったり、クスリに手を出したり……それだけは絶対に許さない。

弘兼 スタッフたちは、そんな守川くんの言動に「本気の愛情」を感じたのだろうね。

守川 僕の要求が部下の成長を促し、その成長が会社の成長にもつながると思うからこそ率直な物言いができる。よく中間管理職の方から「部下に対してものを言えない」という悩みを打ち明けられることもありますけど、僕は

大義さえあれば躊躇なく怒ります。

**弘兼** なるほど。リーダーが私利私欲のために怒っていると感じたら納得できないよね。

**守川** 95年にクラブ「チック」をオープンしたときも、女の子たちにこう言っていました。「お客様を幸せな気持ちにすることで、お客様は再び来店してくれる。そうなればあなたたちの収入が増える。その結果として僕らスタッフも収入が増えるんだよ」って。

**弘兼** 日本企業が海外で事業を展開する際にも、まず現地の法人に利益を与えて、その後に自社に利益を持つてくるとというのが常識なんです。それが自然にできているっていうのがすごいところだよ。

**守川** そうは言っても、経営が軌道に乗るにつれて、事業に対する熱意が失われていって、不動産投資に走ったりした時期もあったんです。ところが、目先の利益に走ったとたん、まるで潮が引くように部下やお客様が離れていくんです。信頼関係の大切さに、あらためて気づかされましたね。

**弘兼** 僕は松下電器のOBなんですけど、今の話聞いて、松下幸之助の「給料というものは、仕事を通じて社会に奉仕貢献していくことの報酬として与えられるものだ」という言葉を思い出しました。会社経営においては、まず消費者やステークホルダーを幸せにすることにによって、結果として利益が

## 六本木の帝王・守川敏氏の足跡

1968年...	山口県岩国市に生まれる。
1989年...	21歳でキャバクラ「おどりだこ」六本木店の店長に。大学生にして当時の一般的な給与月収の3倍を稼いでいた。
1991年...	バブル崩壊。その後、共同経営者の裏切りで遭い、金も仕事もないどん底生活を余儀なくされる。
1995年...	クラブ「チック」をオープン。六本木を代表するナイトクラブに育てる。
1996年...	水商売の利益を不動産という資産に変えるべく、トゥエンティワンコミュニティを設立。
2004年...	トゥエンティワンコミュニティ内にワイン事業部を立ち上げる。
2009年...	ECサイト「ワインショップソムリエ」オープン。



**守川 敏** Satoshi Morikawa

トゥエンティワンコミュニティ代表。1968年、山口県生まれ。日本大学理工学部中退。1995年クラブ「チック」を設立し、六本木を代表するナイトクラブに育て上げる。1996年トゥエンティワンコミュニティを設立。ワインと食を中心とした事業を展開する。

## 僕は 大義さえあれば 躊躇なく部下を怒ります

いてくる。最初から利益を求めらんじやないという戒めです。  
**守川** ビジネスが長く続いて、成長していくためには、その順番は間違っちゃいけないと思います。利益は「目的」じゃなくて「結果」なんですよね。

## 信用できる人、 信用できない人

**弘兼** 守川くんが六本木で働き始めてから30年以上になるのかな？ デイスクの流行から夜の街、そして近年はビジネスタウンへと街の様相も変わってきたけど、いろんなお客さんがいたでしょう？

**守川** 80年代当時の六本木は、いろんな意味で現在より刺激的な街でした。遊びに来るお客さんもいろんな人がいましたね。もちろん財力を持った方ばかりですが、一時の流行で成り上がった人もいれば、長く繁栄されている方もいる。六本木で人々の栄枯盛衰をずっと見つめ続けてきた経験から、その人が10年後、20年後も生き残っている人か、数年で消えていく人かは直感的にわかるようになっていきました。中にはすごく横柄な態度で、支払いのときに現金を叩きつけるような人もいます。そういう人は数年で顔を見なくなります。その一方で、常に謙虚で、お金の使い方もきれいで、人間力を感じられるお客様もいて、その一人が、大手コンビニチェーンの社長を経て、今は誰

もがその名を知る経済界の重鎮になつておられます。当時、その方の立ち居振る舞いに感心しながら、「自分もこうありたいな」と憧れていましたね。弘兼 水商売を長くやっていてる中で、理不尽な思いや、普通の人なら逃げ出したくなるような経験もしてきていると思うんだけど、その「肝の据え方」ってどういうものでしょうか。

守川 初めて自分の店をオープンした当初は、ついてきてくれたスタッフたちを抱え、巨額の借金も抱え、親にも迷惑をかけていましたから、たしかに大変でした。でも、そのこと自体は怖くなかったですね。それよりも、「歩みを止めてしまうことの恐怖」のほうが大きかったような気がします。「世の中のせいだ……」「あの人のせいだ……」なんて、これっぽっちも思いませんでした。いい経験したなと捉えています。ホントに人が見たら呆れるくらいポジティブなんですよね(笑)。

弘兼 そんな逆境の中でも屈しなかったのは、「正しく生きている人が成功するんだ」という確信みたいなものがあるから強くなったから？

守川 そうですね。僕自身はのんびりした性格なんですけど、理不尽なことに対しては、なぜかアドレナリンが出て、メラメラと闘志が湧いてくるんです。店でのトラブルもそうですが、東日本大震災とか、リーマンショックとか……そういう危機の中にあるときに

## スタッフたちは「本気の愛情」を感じたのだろうね



弘兼憲史 Kenshi Hirokane

漫画家。1947年、山口県生まれ。早稲田大学法学部卒業後、松下電器産業(現パナソニック)勤務を経て、91年『課長 島耕作』で第15回講談社漫画賞。2003年『黄昏流星群』で日本漫画家協会賞大賞を受賞。07年に紫綬褒章受章。

頭がより冴えるというか、逆境であればあるほど、「今自分に何ができるんだろう?」と考えることができる。そういうときほど業績が上がったり、組織の絆が深まったりするんです。

弘兼 避けられない困難が目の前に立ちまわったときに、自分ができるところを冷静に考えられるっていうのはす

ごいよね。

守川 普段は本当に情けないぐらいポイントとしていて(笑)。でも、それが功を奏している面もあるんです。リーマンショック直前で世の中が浮かれています。銀行が「ノンリコースローン(特定の事業や資産から生じるキャッシュフローのみを返済原資とする貸し付け)と

かどうですか?」とさかんに勧めてきたんですが、僕はポイントとして何もしなかった。運もいんでしょうね。弘兼 このレストランも相当お金をかけてやっているとと思うけど、コロナの時期だから業者さんも手が空いていて施工価格も下がっている。このチャンスを逃さずに勝負するあたりは、守川くんらしいやり方だよ。

守川 マーじゃんはついていないんですけど(笑)。

弘兼 「逆張り」だよ。世の中が下がっているときには積極的に出て、みんなが上を向いているときには上を見すぎないようにする……。今のコロナ禍も、守川くんは「ピンチはチャンス」と捉えているんだろうね。

守川 そうですね。「こんな時期だからこそ、もつとできることはあるだろうな」とポジティブにアイデアを練っています。



六本木騎士ストーリー  
漫画家弘兼憲史氏が書き下ろした最新作。六本木を代表する高級クラブ「チック」の創業者・守川敏氏の激動の半生が描かれている。守川氏が仲間信頼を勝ち取り、数々の逆境を乗り越えていく姿は、いかなる仕事にも応用可能だ。